

18世紀経済思想史における「industry」と「industrie」 —スコットランド及びフランス啓蒙期の労働概念の解釈についての一試論—

山本 英子（早稲田大学博士課程）*

1. はじめに

本報告は、啓蒙思想と技術進歩の渦中にあった18世紀において重要なキーワードである英語の *industry* と、一般的に同義語と見なされる傾向にあるフランス語の *industrie* を取り上げる。そして、双方の語義が有する本来の差異に着目することによって、スコットランド啓蒙思想におけるインダストリー論での *industry* が示唆した「文明の推進力」の概念や、人間の一性向としての「勤勉」や、主体的な「勤労」の意味を、当時のフランスの経済思想家が用いた *industrie* は示していなかった可能性を提示する。

この考察の際に、まず我々が配慮しなければならないのは、英語の *industry* は語源的にずっと勤勉、勤労、産業活動の意味を持っている¹一方で、フランス語の *industrie* はラテン語から派生した14世紀以降、勤勉という語義は存在せず、生産活動、特に第二次産業を指す言葉として用いられてきたことである²。ここで、「勤労」という日本語に「勤勉に励む労働」と、特に熱心に励むことは強調しない「賃金労働への従事」の2つの意味があることを前提にし、便宜上、それぞれを「主体的かつ能動的労働」と「客体的かつ受動的労働」と呼ぶことにすると、英語の *industry* には「主体的かつ能動的労働」の意味での「勤労」が当てはまる。しかし、もし、フランス語の *industrie* が持つ「生産活動」に「賃金労働への従事」の意味が含まれるとしても、また、それゆえ「勤労」が充てられるとしても、その場合は「客体的かつ受動的労働」を意味することになる。

こうした労働観の違いを考察する際、既存の2つの見解を認識する必要がある。1つは、いわゆるカトリックとプロテスタントの教義に由来する労働観の違いである。英国国教会がプロテスタントの一派であることに着目するなら、イギリスでは隣人が必要とするものを生産して適正な利潤を追求することが倫理的で価値のあることになる。それは隣人愛の実践なのであり、勤勉に労働に励むことで利潤も増加する。しかし、カトリックが主流のフランスでは、神の意思に逆らって原罪を負った人間が、その懲罰として、生きるために労働せざるを得なくなったと考えることにより、人々にとって労働は義務としての辛い作業でしかなく、より一層多く労働に励むようなインセンティブは一般的には存在しないことになる。これらの労働観の違いは、語源的に元々持つ「勤勉」の意味と相俟って

* E-mail address: eiko.924@gmail.com

¹ Elyot (1538). Oxford (1989). Oxford (2012).

² Émile Littré (1957), 934-5. Le Robert (1992), 1019-20. Grand Larousse (1978), t. 4. 2659-60.

industry が啓蒙思想の中で「主体的かつ能動的労働」を明示的に表すのに対して、industrie は勤勉とは無関係に「客体的かつ受動的労働」を表現する理由の一面となる。

もう1つは、「勤勉革命」存在論である。日本の江戸時代に家畜労働（資本）を節約するための人的労働集約によって農業従事者が重労働を余儀なくされた結果、生産性が向上したと指摘した速水（[1979]2003）の「勤勉革命」説から影響を受けた Vries（1994）が、イギリスでも産業革命に先立つ前工業化の時期に労働集約的に生産活動が行われ、労働者が勤勉に働いていたと考え、イギリスでの「勤勉革命」を主張したものである³。

これらの既存の指摘によっても、イギリスとフランスの労働に対する能動性と受動性の違いは説明され得るが、本報告では、ヒューム（David Hume 1711-76）の『道徳・政治・文学論集』（1754）、スミス（Adam Smith 1723-90）の『国富論』（1776）における industry の用法と、チュルゴ（Anne Robert Jacques Turgot 1727-81）の『富の分配と形成についての諸考察』（1766、以後『諸考察』と略記）、コンディヤック（Etienne Bonnot de Condillac 1714-80）の『商業と統治』（1776）における industrie の用法を比較することで、英仏それぞれの思想の中でこれらの各語が異なった役割を担っていたことを検証する。しかし、「主体的かつ能動的労働」と「客体的かつ受動的労働」のいずれの労働観を持っていたにせよ、産業の発展によって財貨が増加し、人々が労働の果実によって消費を享受して生活を向上させていくことは社会にとって有益であるという啓蒙時代の根本的な認識を、彼らが共有していたことは言うまでもない。

2. ヒュームの industry

Industry の発展によって国民の幸福が増大するばかりでなく、主権者の力も増大すると考えていた（Hume [1754]1987, 262/訳 215）ヒュームによる industry の第1に挙げられる意味は、勤勉な「主体的かつ能動的労働」を表す「勤労」である。その用法の中でも、特に人間の気質としての「勤勉」のニュアンスが強調されるのは、人間が陥りやすい怠惰と対極にある徳と比較する場合（「勤労と怠惰」ibid., 203/訳 173. 「感覚、勇気、行儀作法、勤労、思慮分別、天分」Ibid., 594/訳 475）と、以下のような場合である。

…自然は〔人間の〕高尚な能力が眠ったままだったり、あるいは怠惰なままになることを許さず、…その最大限の技巧（art）と勤労（industry）を用いることを人間に迫る。…人間のすべての勤労〔industry〕の大きな目的は幸福の達成である。

（ibid., 146-8/訳 131-2. 傍点は原典、（ ）は訳による。）

³ Vries は勤勉革命と産業革命の密接な連続性を主張するが、速水は「この2つの革命は異なった方向をもつ、対立する概念」だとして連続性を否定する（速水 2003 [2002], 310-1）。Clark and Werf（1998）は、Vries がイギリスでの勤勉革命だとする時期の労働日数が、その前の時代からさほど増えていないことから、勤勉革命の存在に否定的見解を示す。

第2の用法は「産業活動」の意味であり、例えば、「gain and industry」（「利得や産業活動」*ibid.*, 259/訳 214）、「delicacy and industry」（「精緻な嗜好と産業活動」*ibid.*, 264/訳 217）などがある。

これらの「勤労」と「生産活動」の関連について、坂本（1995）は、「industry, knowledge, and humanity」（「産業活動、知識、人間性」*ibid.*, 271/訳 223）という表現を挙げて、ヒュームが「勤労」を「産業活動」と、また「知識」を「知的洗練」と、そして「人間性」を「道徳的向上」とに結び付け、「人間の産業活動一般がその知的洗練と道徳的向上に及ぼす決定的な効果の認識を示し、それを『勤労⁴、知識、人間性』の不可分の連鎖として表現」（坂本 1995, 299）しているのだと説明する。

さらに、ヒュームは *industry* の形態を2つに分けている。1つは、家庭内だけで行われる生産活動で、交換は近隣での物々交換に限られ、生活は質素な状態となる。もう1つは、貨幣を介在させる交換の対象となる洗練された享楽品も含む様々な物の生産活動である。これらの *industry* のうち、ヒュームは、前者の、素朴な技芸による家内工業や近隣での物々交換を越えて、後者の、技術や工夫を発達させ社会で影響を与え合う生産活動こそが、国の富を形成すると説明する（Hume [1754] 1987, 291-3/訳 236-8）。そして、生産労働によって貨幣を獲得することで生活の向上が見込めるようになると、個人の意識の中に本来備わっている勤労意欲（*spirit of industry*）⁵が必然的に増大し、勤労の蓄え（*stock of labour*）も増大するという比例的関係（*ibid.*, 288/訳 234）が生じる。

こうした議論によって、「国民の数と *industry* が相対的に大きいことは、すべての場合に有益である」（*ibid.*, 283/訳 231）と考えるヒュームは、主体的かつ能動的な「勤労」と「産業活動」を一体に捉える *industry* を文明国の国民の生産活動の規模と見なし、*industry* それ自体が文明社会と国民の幸福を牽引するものとして描出した。このようにヒュームが *industry* を主体的概念として敷衍することが可能だったのは、*industry* が派生元のラテン語から継承した「勤勉」の語義を含んでいたからである。

3. スミスの *industry*

ヒュームより20年以上後に、スミス（1776）では *industry* の第1の用法として、人間の一性向である「怠惰」（*idleness*）と対照的に比較された「勤勉」を、第2の用法として、主体的かつ能動的な「勤労」の意味を表した。「勤勉」と「勤労」を区別する解釈

⁴ この *industry* は、田中訳も坂本（2011, 116）も「産業活動」としている。坂本（2011）の別の箇所では同じ「*industry, knowledge, and humanity*」に「勤労」を充て（坂本 2011, 210, 214）、同 213 頁では、*industry* を「地道で勤勉な生産活動」「産業（勤勉）」としており、「勤勉」「勤労」「産業活動」の3つの概念として *industry* が捉えられている。

⁵ 田中訳では「勤労意欲」、坂本（2011）では「勤労の精神」として示されている。

が可能な点もヒュームとは異なるが、さらに第3の用法として、特に勤勉さを伴わずに客体的に観察される個人の「労働」、または総体としての「生産活動」を示している。

第1の、「怠惰」と対比される性向としての「勤勉」は、次の引用に明示的である。

[生産労働の維持に充てられる] さまざまな基金のあいだの割合は、全ての国において、勤勉 (industry) あるいは怠惰についての住民の一般的性格を必然的に決定する。我々は我々の祖先よりも勤勉 (industry) であり、それは、現代では2, 3世紀前に比較して勤勉 (industry) の維持に充てられる基金が、怠惰の維持に使用されがちな基金に比べてはるかに大きいからである。(Smith [1776]1994, 365)

第2の、主体的かつ能動的な「勤労」と解釈される用法は次の文脈である。

労働に対する気前のいい報酬は、一般の人々の増加を促進するとともに、その勤労 (industry) を増加させる。労働の賃金は勤労 (industry) への奨励であり、勤労 (industry) は、人間の他のすべての資質と同様に、受ける奨励に比例して増大する。(ibid., 93)

第3の用法の、客体的に観察される労働や生産活動は、labour, work, business と industry が同義的に並列されたり、または、work や business が labour や industry を振向ける対象として用いられたりしている。

以上のように、スミスの industry は、ヒュームのように文明社会を牽引する主体的かつ能動的な「勤労」ばかりでなく、より客体的に捉えられていた傾向があった。

4. チュルゴの industrie

スミス (1776) より10年早いチュルゴ (1766) における industrie の、第1に挙げられる用法は、第二次産業としての「加工業・製造業」の意味である。例えば、「la culture, l'industrie et le commerce」(Turgot 1766, 598/訳 121) と、「les entreprise de culture, d'industrie ou de commerce」(ibid., 599/訳 122) という記述では、第一次産業の農業と、第二次産業の加工業、そして、第三次産業の商業を対比させて表しており、industrie は第二次産業を代表させる用語として用いられている。

チュルゴの industrie の第2の用法は、「技能的労働」の意味での使用である。これは、travail と industrie が並列されている場合 (ibid., 570/訳 99, 574/訳 102, 576/訳 104) に顕著で、travail を「単純労働」、industrie は単純労働を超える「技能的労働」と解せる。

第3の用法は、産業全体における「労働・生産活動」である。例えば、「en se contentant du surplus du profit et du salaire de son industrie」（「残りの利潤と彼の勤労の報酬で満足する」、*ibid.*, 595／訳 119）という箇所は、訳では「勤労」が充てられているとしても、この *industrie* については、主体的かつ能動的労働ではなく、客体的労働であり、スミスの第3の用法である賃金報酬の対象としての労働である。

このように、チュルゴの代表作における *industrie* は、その多くが第二次産業を示す「工業・製造業」という意味で用いられている他は、単純労働と比較する「技能的労働」、そして、「労働・生産活動」という意味で用いられており、*industrie* によって「勤勉」の意味や、主体的かつ能動的な「勤労」の概念は示唆されていない。

5. コンディヤックの *industrie*

スミス（1776）と同年に公刊されたコンディヤック（1776）の中でも、チュルゴが多用した第1の用法である「加工業・製造業」の意味に見なせる場合が多い。例えば、「我々の土地と我々の *industrie* からもたらされる奢侈品については、何らかの有用性は持ち得るが、その弊害がないわけではない」（Condillac 1776, 212）という箇所が挙げられる。ここでは、第一次産業を示す「我々の土地」と、第二次産業を示す *industrie* とを対比させながら、奢侈品が農産物を原材料にして製造加工されることを示している。また、同じ用法の「各国家の富は、土地の肥沃さと、住人たちの *industrie* に相応する」（*ibid.*, 246）という箇所では、「土地の肥沃さ」を農業に結び付け、「住人たちの *industrie*」を加工業や製造業として示しながら、農業と工業それぞれの活動の産物が国家の富になることを述べており、農業と対比した第二次産業を表す語として *industrie* を用いている。

コンディヤックによる *industrie* の第2の用法は、「技能的労働」である。また、同時に第3の用法としての「生産活動」も挙げることができる。次の文脈の前半において、*industrie* は、耕作者・手工業者・商人それぞれの職業に固有の「技能的労働」を表しており、第二次産業以外の労働も意味しているが、後半では、土地からの収穫物に価値を与える「生産活動」、とりわけ収穫物を加工する第二次産業の労働を示している。

もし、職人や商人の存在しない集落での困窮状態と、職人や商人の *industrie* による二次的な必需品、言い換えれば、習慣が必要にさせる諸物を集落が享受する豊かな状態とを比較するなら、その集落にとって、職人や商人の *industrie* は耕作者の *industrie* と同じように富の元となるものである。

もし、我々が一方で、土地が生産物の源泉であり、したがって富であると理解するなら、我々はもう一方で、*industrie* は、それがなければ価値を持たない土地生産

物に価値を与えるということが分かる。それゆえ、industrie もまた、結局は富の源泉であることが示されるのである。(ibid., 50)

また、チュルゴのように travail と industrie を並列している場合、travail を「耕作労働」と捉えれば、対置された industrie を第1の用法の「工業・加工製造業」と解せるし、travail を「単純労働」と捉えれば、industrie は第2の用法の「技能労働」と解せるが、いずれにせよ、travail は第一次産業、industrie は第二次産業を示している。もし、これらの用法に「勤労」という日本語が適用されるとしても、チュルゴもコンディヤックも特に勤勉性を持たない「賃金労働への従事」を表しているのであり、少なくとも主体的かつ能動的な労働ではない。

第4の用法として挙げられるのが、技能的労働とも関連する「才覚・手腕」「創意工夫」である。

このように、チュルゴやコンディヤックが用いた industrie は、ヒュームやスミスが用いた industry と同義に捉えると、チュルゴやコンディヤックの意図とは異なった理解になる可能性がある。フランス語の industrie は、勤勉に意欲を以って主体的かつ能動的に働く「勤労」ではなく、第二次産業を表す「加工業」「技能的労働」「生産活動」を示している。

6. おわりに

以上で、スコットランド啓蒙思想とフランス啓蒙思想において、industry と industrie の語はそれぞれ異なる語義を担っていたことを、当時の文脈から検証してきた。ところで、ヒュームは「勤勉と自己享受の初期資本主義の担い手の世界を観察し」、スミスは「ピン工場の内部にメスを届かせること」ができ「分業と資本蓄積が織りなす、資本主義の現実により深く迫り得た」(坂本 2011, 122) としても、ヒュームのインダストリー論はムロン ([1734]1736) の産業推進論と共通の視点を持ち、また、スミスが『国富論』で描写した有名なピン工場の18工程の例は、スミスに先立ってその18工程の分業を詳しく論じた『百科全書』の「epingle」(ピン)の項目(Diderot 1772, 804-7)から借用しているように、英仏双方の思想家たちは互いに少なからず影響やヒントを受け合っている。加工業は材料を変形するだけで何も富を生み出さないため「不生産的」だと見なすフィジオクラシーの労働観も存在するフランス思想の中にあっても、industrie は第二次産業の生産活動を表示する語として定着していたのである。しかし、industrie の用語自体は「勤勉」という「主体性」の意味を含むことはなかった。

このように、スコットランドとフランス啓蒙思想家たちは、互いに第二次産業と第三次産業を推進する効果について認識を共有していたが、industry と industrie の語義の相違には注意を払いながら理解する必要がある。(文献表は当日配布致します。)